鎮守の森だより

NPO法人社叢学会ニュース
第92号
2018年3月3日

平成30年度年次総会概要決まる

樹木信仰と風と水の聖地で充実の2日間を

6/9・10に諏訪大社(長野県)で

今年の年次総会・研究発表会・シンポジウムを6月10日(日)に諏訪大社で開催する。諏訪大社は、諏訪湖周辺の上社、下社それぞれ二宮の四社からなる信濃国一宮。全国に約2万5千社といわれる諏訪神社の総本社でわが国最古の一つと言われる。上社前宮以外には本殿がなく、下社秋宮はイチイを、春宮はスギを神木とし、上社本宮は守屋山を神体山として拝むという古代信仰の形を今に伝えている。

諏訪湖の北東岸の諏訪平は「縄文のビーナス」が出土した棚畑遺跡や尖石遺跡など、縄文時代に遡る古い土地柄。諏訪神が鎮座する以前に遡る祭祀遺跡も残されている。シンポジウムでは、御柱祭のみならず、風・水の守護神として五穀豊穣を、また狩猟の神として狩猟・漁業の守護を祈願する諏訪大社の多様な姿を多面的に議論する。

前日の四社巡拝と合わせて、今回も充実した2日間になるだろう。

6月10日(日):諏訪大社下社秋宮

9:30～10:15	年次総会
10:20～12:00	研究発表
13:00～17:00 13:00～14:00 14:15～16:30	シンポジウム 基調講演 パネルディスッカション
16:30～17:30	懇親会

見学会は諏訪大社四社を巡拝

総会に先立つ９日(土)の見学会では、諏訪大社四社(下社秋宮・春宮、上社本宮・前宮)を巡拝する。両社で祀られる主祭神は建御名方神(たけみなかたのかみ)と八坂刀売神(やさかとめのかみ)。下社秋宮での正式参拝・境内拝観の後、下社最初の遷座地とされ春宮へ。社殿3棟が国の重要文化財に指定されている。午後からは、まず赤石山脈北端の守屋山北麓に鎮座する上社本宮を拝観。社殿６棟が国の重要文化財に指定され、社叢は落葉樹からなる自然林で長野県の天然記念物に指定されている。最後に諏訪の祭祀の発祥地とされる前宮を参拝・拝観し四社巡拝を締めくくる。

6月9日(土) 見学会:諏訪大社四社巡拝

10:00	諏訪大社下社秋宮集合　正式参拝
10:30～11:00	下社秋宮境内拝観
11:00～12:30	専用バスで下社春宮に移動　自由参拝・境内拝観
13:00～14:00	諏訪市内で昼食
14:10～15:00	諏訪大社上社本宮自由参拝と境内拝観
15:10～16:00	諏訪大社上社前宮自由参拝と境内拝観
16:00～16:40	上諏訪駅経由で下社秋宮へ・解散

第79回関西定例研究会　報告

2018年1月27日
(於:京都教育文化センター)

中世以降における神社林の変遷

講　師：小椋　純一(京都精華大学教授)
ｺﾒﾝﾃｰﾀ：上甫木昭春(社叢学会理事・大阪府立大学教授)

「鎮守の森」には里山の森林にはない珍しい樹木や巨木などが見られることがあるため、古くから人の手があまり入ることなく続いてきたと考えられることが多かった。が、ここ10年あまりの研究で、そうではないことが明らかになってきている。

明治・大正期の写真から　神牡林の姿は、明治・大正時代でも、今とは大きく異なっていた所が少なくない。『日本写真帖』(1912(明治45)年発行)や『京都府誌』(1915(大正4)年発行)を見ると、例えば下賀茂神社では、現在の写真と比較すると、数多くあったスギタイプの樹木がなくなり、クスノキやサクラなどが見られるなどの違いがわかる。

こうした古い写真は、有名な神社付近に限られる傾向にあるが、文献や地形図からは、より多くの神社林のかつての様子を知ることができる。関東地方では、明治10年代に測図された「迅速図」と同時に作成された『偵察録』の記述からも、多くの神社の植生の概観を知ることができる。

近世の状況　近世の神社関係の文献は多いが、その記述だけで当時の神社の森の姿を復元することは容易ではない。大国魂神社(府中市)では社叢調査の詳しい記録が残されており、1815(文化12)年の樹木の位置図も作成されている。そこからは樹木の８割近くがスギであったこと、また本殿裏にはケヤキが多くあったことなどがわかる。

一方、上賀茂神社や下鴨神社、八坂神社などでは多くの記録と共に絵図類も残されている。近世の絵図類では共通してマツやスギなどの針葉樹の描写が多く、神社に残された文献資料から推定される植生景観とも矛盾しない。近世においても、例外はあるとしても神社林の主な樹種がマツやスギなどの針葉樹であることが多かったと考えられる。

中世後期(室町時代)の京都の神社林　中世は非常に期間が長く、鎌倉時代と室町時代とでは神社林のあり方は違っていた可能性が高い。

中世後期の京都の神社については、16世紀初期から中期にかけて制作されたと考えられるいくつかの洛中洛外図をもとに考えることができる。そこには当時の町並みや風俗などが細かく描かれていて、植生景観に関しても当時の状況を反映して描かれている可能性がある。それによると、京都の神社では、広葉樹が一部にはあるとしても多くはマツ・スギで、近世と近い状況であったと推測される。

鎌倉時代の八坂神社　鎌倉時代は室町時代とは違っていた可能性がある。八坂神社(祇園社)には1331(元徳3)年に造進された「祇園社絵図」が残っている。境内の建物の配置などが詳しく描かれていて、植生についても実態を比較的忠実に描かれている可能性が高い。ここでは境内の樹木の葉が赤く塗られていることから、落葉広葉樹であることが推測できる。あとは本殿裏などにスギ、楼門の外側に目立たない形でマツが描かれている。本殿裏のスギと見られる樹木については、『梁塵秘抄』(平安後期)に歌われていて、これが鎌倉時代でも重要な樹木として存在していた可能性が高いと考えられる。現在、八坂神社で一番大きいのはムクノキだがクスノキが多い。本殿裏のスギは消えてしまいケヤキなっているが、これもクスに押されがちになっている。

出雲大社の場合　出雲大社には1248(宝治２)年の遷宮のおりに描かれたと見られる「出雲大社并神郷図」がある。樹種、あるいは樹木のタイプが明確に描き分けられていて、CADで立体化した現在の地形データともほぼ一致することから、植生描写も実態を比較的忠実に反映している可能性が小さくないだろう。

ここで読み取ることができるのは、大社本殿のすぐ背後のあたりを中心に、葉が赤く彩色された落葉広葉樹の大木が複数見られることで、本殿などを囲む塀の外側にも大きな落葉広葉樹と思われる木々が多く描かれている。2000年から実施された発掘調査では社殿の柱の下からケヤキの葉が出てきており、この絵図と矛盾はない。

同時代の「春日権現験記絵」や「一遍聖絵」の石清水八幡宮を描いた図などでも、神社付近に落葉広葉樹が比較的多いという状況を見ることができる。

むすび　室町時代後期から近代までの神社林は、一部例外はあるものの、マツやスギなどの針葉樹が中心のところが多かったと考えられる。しかし鎌倉時代には、少なくとも絵図等に描かれた神社では、いずれもマツやスギの数は少なく、落葉広葉樹が多く存在したものと考えられる。

近世にマツが大幅に増える一方で落薬広葉樹は大きく減少した背景の一つに、落ち葉までをも資源として利用する強度な利用が考えられる。これが長年続くと土地が痩せ、痩せ地でも元気に生育できる数少ない樹種である先駆種のマツが増えたのだろう。

京都では室町時代後期以後、植生の強度な資源利用の結果、マツが主要な樹種となっていた神社が多かったと考えられる。一方鎌倉時代には、少なくとも祇園社や出雲大社等の格式の高い神社では、落葉広葉樹が多く残っていたということかもしれない。

一方、原生林的と言われることもある現代の神社林の景観が生まれてきた背景には、明治以降、政府の神社保護により、木を切ってはいけないという考え方が広がったことがあるのではないだろうか。

いずれにしても中世以降、　神社林は大きく姿を変えて今に至っているのである。

第76回関東定例研究会　報告

2018年1月27日
(於　國學院大學)

6本の年輪―被災後の福島県南相馬市から

講　師：森　幸彦(伊勢大御神(南相馬市)宮司・福島県立博物館専門学芸員)

東日本大震災から6年の月日が経とうとしている。

会津若松で博物館の学芸員として縄文土器の研究をする傍ら、実家の南相馬市では複数の兼務神社宮司でもある森幸彦氏に、被災当時の映像とともにこれまでの復興活動の様子と今感じていることをお話しいただいた。

1. 被災地ふくしま

今年、博物館勤務では定年を迎えるにあたり、新しく迎える学芸員を募集したが、残念ながら東京の学生からは応募はなく、今も風評被害の影響があるのだと感じている。

3月11日の大地震、そして津波。津波は松林を超えて高さ15mはあったと聞いている。その後、福島第一原発の爆発事故により今なお多くの人々が故郷を離れ避難を続けている。「原子力 明るい未来のエネルギー」という標語が掲げられた看板は東京電力により撤去され、批判を込めて博物館で保管している。

地震直後に会津若松から救援物資を積んだ車で南相馬に向かったが、雪で峠を越すことができず福島市で一泊し、翌日南相馬に入った。父が入院している病院にいくと両親に会うことができた。神社の様子を見に行くと氏子さんの一人が亡くなったことを聞く。仮葬儀をしたいので御霊を鎮めてほしいと依頼があったが、午後に引き取られるはずのご遺体は放射線の影響の懸念から、被災した場所からは移動させてもらえなかった。

2. 被災神社と社叢

被災地の神社に多く大木が残ったが、その枝葉により放射線量の数値が下がらないと考えられ、伐られてしまった。本当なら今年６本の年輪分大きくなっていただろう樹木たちも、未来を絶たれてしまったのだ。

津波で流失した神社のほか、氏子が多数亡くなられたり、全員が避難してしまい部落自体がなくなってしまった神社や、元あった場所に防潮堤が作られることになり別の場所に移動、合祀されたりした神社もある。

鶏足神社で12年に一度、酉年に行われている浜降り行事では、昨年、困難を乗り越え再興されたが、神輿の通り道と浜の間に防潮堤が建てられ、これまでの祭りの姿は変化を余儀無くされ、12年後に継続されるのかも危ぶまれている。

氏子の出資のみならず、諸財団等復興関連の支援により鎮守の森の再生も行われ、植林には多くのボランティアが集まった。

熊本県立球磨工業高等学校の伝統工芸科の生徒からは手作りの鳥居が贈られたりと、たくさんの交流があった。

3. 自然の脅威とつないできた生命

千年に一度の大津波と言われるが、縄文時代はおよそ１万年続いていることを考えると、この規模の大津波が10回は起きていたことになる。当時の簡素なつくりの建築物を考えると現代よりも復興はしやすかったことだろう。便利だが物が増えすぎた現代を考え直させられる。原発もそのひとつだろう。

縄文土器は煮炊きをするための道具であるが、一度絶たれた命は土器の中で水と熱エネルギーを加えられ、それがまた人の体に入り新しい命になっていく。土器の中で死と再生が繰り返されているのだ。土器の装飾を見てみるとまさに死と再生が表現されているように思われる。縄文時代からこれまで、繋げられてきた死と再生の文化をこれからも伝えていきたい。

（文責・渡邊節子）

次回予告【第77回関東定例研究会】

◆日　　時：4月21日(土)　14：00～16：30
◆場　　所：國學院大學渋谷キャンパス120周年記念２号館１階　2104教室
（東京都渋谷区東4-10-28）（教室は変更の可能性あり）
◆テ ー マ：「東京付近の鎮守の杜の現状を観る」
～武蔵国社叢見守り隊の調査をふまえて～
◆講　　師：木村　甫　（社叢学会理事）

共催：國學院大學環境教育研究プロジェクト・ポーラ伝統文化振興財団　※上映映像未定

日本学術振興会賞の推薦を募集
優れた若手研究者を顕彰

日本学術振興会議では、若手研究者の研究意欲を高め、研究の発展を支援するために、やがては世界で活躍するであろう創造性に富み、優れた研究能力を有する若手研究者を顕彰する。対象者は45歳未満で博士の学位を取得もしくは同等以上の学術研究能力を有するもの。日本国籍を有するか、外国人ならば日本で５年以上研究していることが求められる。同会が設置する審査委員会が25名程度選考する。

当学会からの推薦を求める場合は、事務局にその旨を伝えられたい。また、優れた研究実績を有する我が国の学術研究者からの個人推薦も受け付けている。

詳細はhttp://www.jsps.go.jp/jsps-prize/ 。

事務局から

- 北陸地方などの甚大な大雪災害の折には、皆さまご無事でいらっしゃいましたでしょうか？雪のみならず、厳寒に加えてインフルエンザの大流行など、今年はことのほか厳しい冬となりました。春先といえばそうでなくとも不順な季節です。くれぐれもご自愛下さい。
- 年次総会は別記の通り、その勇壮さで全国に名をとどろかす御柱祭を斎行する諏訪大社で開催いたします。漁業や農耕の神として全国から広く信仰を集める一方で、土着のカミへの祈りも濃厚に残すといわれます。ぜひご参加ください。研究発表も募集中です。こちらも奮ってご応募ください。
- 会誌『社叢学研究』第16号を同封いたしました。今号も力作ぞろいです。「活動報告」や「社叢訪問記」など、会員の皆さま方のページも充実してまいりました。ぜひ、ご投稿ください。
- 事務局のFAX番号が電話番号と同じになりました。いずれも075-212-2973です。

編集後記

真夜中の秘かな楽しみだったカーリングがあれよあれよという間にメジャーになって、ついにはメダルまで取っちゃったよ。ほぉ。

で、今回も見つけてしまった”これどうよ”。それぞれの競技の経験者であろう実況中継の解説者。ついつい熱くなるのはわかるんだけど、「いいですね、かっこいいっ！」とか、「行けっ!!そうだ!!　行けっ!!」とか。それって解説？ま､それはそれで臨場感満載ではあるんだけどね。

でそんな中、なかなか来ぬ原稿を待つのは、寒風吹きすさぶ戸外で、中断した競技の再開を待つのと同じよう。。。年年歳歳、えーかげんにしなはれ！　書かれへんなら、そうゆーてくれたらそれなりの対処ができるでしょーが。ついには催促しても無視かい。せめて頑張ったけど書けませんでしたくらいはゆーたらどやの？　（藤岡　郁）

研究発表者募集！

テーマ：社叢に関する理論的研究や社叢の保存・拡充に関する実践的調査研究
※ いずれも未発表のものに限る
発表時間：20分（報告15分+討議5分）
応募締切：2018年3月末日必着
応募要領：住所・氏名を明記の上、発表内容を300～400字にまとめ、E-Mail、FAX、郵便で本部事務局に送付

次回予告【第80回関西定例研究会】

◆日　　時：2018年3月24日(土)　13:30～15:30
◆場　　所：伏見稲荷大社儀式殿（伏見区藪ノ内町68）
◆テーマ：生態学からみた東南アジアの森と宗教
◆講　　師：神　崎　　護（京都大学農学研究科教授）
◆ｺﾒﾝﾃｰﾀ：渡　辺　弘　之（社叢学会副理事長・京都大学名誉教授）

発行人　社叢学会事務局　〒604-8115京都市中京区雁金町373番地みよいビル303号
TEL・FAX 075-212-2973
URL http://www.shasou.org　E-Mail　shasou@ams.odn.ne.jp
社叢学会関東支部　〒368-0041　秩父市番場町１－１　秩父神社社務所内
TEL080-1514-5032　E-Mail　shasougakkai@hotmail.com